

て、かき合せて暫置て、次麝香にあはせ、さるかたの沈をかきひろげて、其上に件の貝香等をわかちをく、かき合せ終りて、又はじめのごとくかきひろげて、射香にあはする方の丁子沈を其上にわかち置て能々和合する也、次にあはせふるひ二度、其後一宿を経て、その香互にそむをよしとす、まかうしてのちあまづらに和す、是秘傳也、急ぐ時かならずしもまからずといへり、

又云、大一劑といへども、小目上かけわかちて是を合、有便よく和合する也、あまづらに和する時、おほかるといへども、わづらひなきなり、凡香わする時、一番の香にをく香は、焼時その香最末に出くる也、最末にをく香は、たく時其香最前に出来るに、よて能香をもて前後に是ををく、貝薫陸のたぐひ、中間に是をまじふ、その香あながちにいださざらんが爲なり、是甚深の秘説なり、

梅花方 沈 二兩 二朱重シ 丁子 一兩 重シ 貝 二分 輕シ 白且 二朱 輕シ 薰陸 二朱 重シ 甘

松 一分 射香 三分 重シ 合する次第黒方におなじ、射香に合する方に、甘松をあはする也、侍從

荷葉させる秘方なし、只諸家の方を持てはからひて合す、

諸香増減用心

沈香に隨ひて、他物聊増減の用心有べし、但其沈にむかはすば、かねて其程を定がたし、よくかきわけまじふべき也、沈のかも一樣にあらざるなり、その香つらなれば、餘香いさゝかさしそふ也、淺香のごとくその香すくなくば、他の香ををのく減すべきなり、凡貝はくさしといへども、是をくはへずば、其香遠く匂ふべからず、薰陸其用なしといへども、是をくはへずば、其かものにもまざるなり、

〔むくさのたね〕たきもの、方さまぐなれど、つねにあはするは六種なり、梅花、荷葉、菊花、梅花は春のむめのなつかしき香にかよへり、荷葉はなつのはちすのすゝしき香にかよへり、菊花は秋のきくの身にしむ香にかよへり、落葉はふゆの木のはのちるころ、はらくとにほひくるにか